
刀語×Fate ~現代に集う英雄たち~

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刀語×Fate

（現代に集う英雄たち）

【NZコード】

N4219Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

時を遡ること数百年前・・・第1次聖杯戦争・・・

その場に召喚されたサーヴァントたちは、なんの因果か「刀語」において時代に名を刻む英靈たちだった。

まだ戦国の世が終わつて間もない時代、に激闘を演じた英雄たちが、今一度現代に蘇り、聖杯をめぐる・・・

始まり始まり
・
・

～英靈召喚～（前書き）

刀語とフェイントのクロスオーバー作品です。

召喚されるサーヴァントが全て刀語関係の人物という。
洒落にならない不自然さ。

正直両作品とも知っている方はそんなにいると思いませんが。
知っている方は、楽しんでください・・・

（英靈召喚）

そこには一人の人間が居た。

暗い、狭い、臭い。

床には謎の文様がある部屋だった。

そんな場所に彼女は一人で立っていた。

そしてその少女の目の前には、朽ちかけの誰かの白髪が置いてあつた。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

その場にいた一人の少女は、何かを喋り始めた。

「繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シユバインオーラグ」

「振り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「告げる・・・・・」

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

「聖杯の寄るべに従い、」の意、」の理に従つなれば應えよ・・・」

「誓いを此処に、私は常世総ての善と成る者、私は常世総ての悪を
敷ぐ者」

「汝三代の言靈を纏う七天、抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ
！」

床の文様が輝き、部屋全体が揺れる。

大気が震え、目の前が光り輝く。

そして少女の目の前に「何か」が現れた。

現れたそれはヒトではない。

ヒトであった、かも知れないが、今はヒトではない。

そんなものが少女の目の前に現れた。

「・・・あれだ、えつと・・・」

現れたそれは少女に向けて喋り始めた。

「あなたが俺のマスターか？」

～英靈召喚～（後書き）

結構ミスマッチなクロス作品ですが・・・

うまく行くよつに頑張ります。

～甦る虚刀流の男～（前書き）

続きものなので、少しづつキャラを増やしていくと思います。

始まり始まりつつ？

「甦る虚刀流の男」

「あんたが俺のマスターか？」

それはそう言つた。

「ええ、私が貴方のマスターよ

少女はそれの言つことにも応えた。

「それで、貴方のクラスはなに？」

続けざまに少女はそれに質問をした。

「ああ、俺は多分、セイバーだと思ひぜ」

表情を変えることなく、淡々とそれは応えた。

「わかつたわ」

短くそれだけを言つと、少女は扉の前まで行き、部屋を出た。

「・・・・・」

それは黙つて立つていた。

「一」

何かに気づいたように、それは床の一部を見つめていた。

視線の先には朽ちかけの白髪が置いてあつた。

「ゆっくりと、それは視線の先に近づき、跪いた。

「久しぶり、とがめ」

それは表情を崩し、微笑んでいた。

「なんで貴方が私の名前を知ってるのよ？」

少女は扉の横で、跪くそれを見つめていた。

「ん・・・? あんた、とがめって書いつの?」

「やつよ、咎める女と書いて、とがめと読む」

少女は言い終わると、その田の前に来た。

「真名は?」

「真名?・・・ああ、本当の名前か」

ぬつ、と立ち上がり。

それは静かに、若い声で言った。

「虚刀流七代目当主、鑓七花、だ」

言い終わったその口元に、少女は寂しさを感じた。

「予想通りの名乗りね、まあそのために聖遺物を口にしたんだも
のね」

少女は床に置いてあつた白髪を、ひょい、つと掴んだ。

「貴方に一番親しい人物の遺物……でしょ？」

「・・・まあな」

悲しげな視線で、それは白髪を見つめていた。

先程の微笑みは、今は消えている。

「ちよつと、辛氣臭いわよ」

少女はケタケタ、と笑いながら言った。

「とにかく、これからはお互いパートナーなんだし、ヨロシクね」

「ああ

それが、七花と、咎女の、出会い。



同時刻・・・・・

「俺は、眠いんだよ

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「拙者ことあめこひもひらいだいわざる」

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「不名乗、名乗る必要はない」

（）（）（）（）（）

同時刻・・・・・

「うわらは遊びに来たですよー。」

~~~~~

同時刻・・・・・

「早々で申し訳ありませんが、私は死にたいんです」

~~~~~

同時刻・・・・・

「ぼくは英雄じゃなくて、仙人なんだけどね」

~~~~~

時を同じくして、七体のサーヴァントが現代にその勇姿を表した。

しかし、その全員が、全員に面識のある人物だとは、誰も知らない。

少なくとも、今はまだ。



## 「甦る虚刀流の男」（後書き）

刀語を読んでいる方は、誰がでるか分かつてしまつたかもしませんね。

続きます。

## 「蘇る居合斬りの浪人」（前書き）

今回登場するは、生前、因幡砂漠に城を構えた浪人。

光速を超える居合斬りの達人。

名を宇練銀閣。

そんなこんなで雑劇寸劇茶番劇。

フェイト／カタナガタリ第3話・・・

始まり始まりつ

## 「蘇る居合斬りの浪人」

そこはとある教会。

教会の床には謎の文様が刻まれている。

そこには前者と同じく女性が立っていた。

少女と呼ぶには大人びていて。

大人と呼ぶには幼く感じる。

大学生のような女性。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

その女性も謎の言葉を唱え始める。

簡略。

・・・「天秤の守り手よ…」

女性の目の前は光り輝き、教会から光が漏れる。

突風が吹き、女性の服がたなびいた。

そして、またしても、それは現れた。

今はヒトではないそれが、この女性の前にも現れた。

「…………」

それはぱりゅせり開ひてこむのみだ。

あぐらをかき、刀を肩を支えに抱いている。

黒髪長髪のそれは、眠つている。

「あの…………起きてもうれますか？」

女性はそれに対して、声を発した。

それは皿をゆっくりと開けた。

浅い眠りだったようだ。

ふつ、と言つて首を少し動かしたそれは女性に。

「おまえさんが……俺のマスターって奴か？」

と、言つた。

「はい……そうです」

女性はか細い声でそれに返答した。

「分かつた……それで、俺に用でも……？」

ふわあ……とあぐらをしながらそれは言った。

「えっと・・・名前を教えてもらいますか？」

「人に名を聞くなら、自分から、じゃないか？」

それは肩を回しながら言った。

「あっ、すいません・・・私は間桐瞬つて・・・言います」

「ああ、まとう・・・まじか、ね・・・」

手のひらで顔をこすりながらそれは言った。

「じゃあ、あなたの名前も教えてください・・・」

「ああ・・・・・・名前ね・・・名前・・・」

田をこすりながら、それは立ち上がり。

「宇練家十代目当主、宇練銀閣・・・だ・・・」

ようようと立ちつつ、それは生前の名を名乗った。

「宇練さん・・・・・・ですね」

瞬はそれの・・・いや宇練といつ名を確認して、更に尋ねた。

「じゃあ、クラスはなんですか？」

「クラスね・・・・・・アサシン、ってクラスじゃないか？」

銀閣は退屈そうに周りを見回しながら応えた。

「えつ、アサシンですか・・・？」

瞬は少しだけ驚いたようだった。

それは瞬の知っている銀閣が「剣士」だったからだ。

てっきりセイバーのクラスで現れたと思っていた瞬は。

「なんで・・・アサシンなんですか？」

と思わず聞いた。

質問が多いな・・・、と銀閣は頭を少しかいた。

「あれだ・・・暗いところに屈座つてたのと、よく暗殺者に・・・  
狙われたから・・・かな」

納得のいく回答とは言えない回答だったが。

「あつ、そういうんですね、分かりました

と瞬は納得した。

「眠いんだが、寝ていいか？」

銀閣は腰を下ろして、目を軽くこすった。

「あ、あのー」

瞬は少し大きな声で言つた。

「これから、よろしくお願ひしますー。」

そして瞬は手を銀閣に差し伸べた。

しかし。

「・・・・・」

握手を求めた瞬の手は握られず、銀閣はすでに眠りに落ちていた。

「・・・私も、眠くなつちやつたかな・・・」

教会のど真ん中で寝てゐる銀閣を、瞬は隅まで移動させた。

「おやすみなさい」

そして瞬も教会の椅子に腰を下ろし、置いてあつた毛布で体を包んだ。

それが、銀閣と、瞬の、出会い。

## 「蘇る居合斬りの浪人」（後書き）

はい。

順番的にセイバーの次がアサシンってどうよ？

と友達に言われてしまいました、が。

一応銀閣は2番目の敵なので。

順番は折れてないです。

というわけで、次回は「不」を誇りとする元忍者。

が登場する予定です。

では。

## 「未練を残した相生の元忍者」（前書き）

今回登場するは、全てを一度失つた男。

失われた忍法・拳法・剣法を駆使する。

名を左右田右衛門左衛門。

そんなこんなで奇態失態時代劇。

フェイト／カタナガタリ第4話。

始まり始まりつ

## ～未練を残した相生の元忍者～

そこはどじやの屋敷。

和風の作りにして、部屋は全てふすまにて区切られている。

そんな和室の一室に。

またしても女性が立っていた。

いい加減男キャラを出せ、といつ声は聞こえないふりをするしかない。

そしてその部屋の床にも、謎の文様が同じように刻まれている。

更に、その文様の中心には、「不忍」と書かれた、安っぽいお面が転がっていた。

「準備オーケー」

その女性は青い瞳で田の前の光景を確認し。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

前者と同じ言葉。

簡略。

「天秤の守り手よ～！」

ちょっと軽い声で女性が言い終わると。

部屋に風が流れ、少しふすまが揺れた。

そして予想通りそれは現れた。

黒い洋風スーツを纏、顔面に「不忍」と書かれたお面をしている男。

それは現れた瞬間から跪いていた。

「お久しごりでいらっしゃいます、否定姫様」

それはそう言った。

「否定する~」

そして女性はそれを否定した。

「私はお前の言うことを否定する。私は否定姫じゃない」

女性は続けざまに否定を続けた。

「そうでしたか。では、否定姫によく似ている、あなたは一体・・・

」

少し寂しげな表情をして、と言つても表情は確認できないが。

それは女性に問い合わせた。

「私はあなたのマスター。それ以下でもそれ以上でも、はたまたただのマスターでもない」

女性は続けて言った。

「否定姫、つてのは確かに私の祖先だけど、私は否定姫じゃない」

それの言つことに分かりやすく、女性は応えた。

「では、マスター。あなたの名前は」

「否定姫」

「は?」

女性の名乗りに、それは疑問を持った。

「勘違いしないでね、私は否定姫じゃない、だけど私は否定姫と名乗る」

そして、こう続けた。

「あなたが仕えるべきなのは、いつの時代も否定姫だけなのよ」

女性は何かをぼかすように言った。

「感謝します」

それは短く女性に返した。

その類には、なにか水が伝つていったようだが、それは氣のせいだろう。

「それで、あんたのクラスは」

艶やかな声でそれ聞いた。

「アーチャーです」

「ふうん、まあそれもそうよね」

納得したかのよつて女性は続けた。

「あんたの宝具は、飛び道具だものね」

まるでそれの全てを知るかのよつて。

女性は言いのけた。

「で、あんたの名前は、左右田右衛門左衛門、で間違いないわよね

「はい」

皿うなが乗つを上げる事すら、それは出来なかつた。

「右衛門左衛門、とりあえずまよひじく、と言つてあげる」

女性は区切り区切りで言つた。

「うひうひうひ、否定姫

「花丸」

女性は少し微笑んで、それに言った。

「マスターとサーヴァントって関係は正直、面倒くさいのよ」

続けて。

「だから私は一心同体、と表現するわ」

と言った。

「姫様に頂いたこの名にかけて、勝利を約束します」

ふふっ、と笑つて女性はふすまに手をかけて言った。

「じゃあ私はもう寝るから、あんたは・・・屋根裏にでも寝なさい」

そう言つて、ふすまをピシヤ、としめた。

人間の居なくなつた部屋で、それは短く言った。

「はい、否定姫様」

それが、右衛門左衛門と、否定姫の、再開・・・いや出会い。



～未練を残した相生の元忍者～（後書き）

次回は怪力剛力の無双少女。

一族の最後の生き残りにして、虚刀流を破った少女。

が登場。

## 「天真爛漫な剛力少女」（前書き）

今回登場するは、極寒の冬山で生まれ育ち。

無双の怪力を有し、無邪氣で純粋な少女。

名を凍空こなゆき。

そんなこんなで一体全体時代劇。

フェイト／カタナガタリ第5話。

始まり始まりつ

## ～天真爛漫な剛力少女～

そこは山中。

正確には山中の山小屋。

内部に区切りはなく、大きな一部屋で構成される山小屋だ。

その小屋の床には、恒例の謎の文様が刻まれている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ」

いつもどおり、同じような言葉が聞こえる。

若い、男の声だ。

やつと男キャラがでてきた事に、感動を覚える。

簡略。

「天秤の守り手よ」

小屋 자체はボロい作りだ。

文様から吹き出た風により、入口の扉が外れて吹っ飛んだ。

そして小屋のあらゆる場所から、光が漏れた。

案の定、それは現れた。

全身を白い防寒具のよつな毛皮で包み。

幼さの中に純粹さを感じる、少女の姿。

「あなたが、いつかちのマスターですか？」

それは一般に「口づけ」でやうづいた。

見た目通りに、幼いようだ。

そして、元からいた男性も。

「うん、僕が君のマスターだよ」

と言った。

男性の方も、身長こそそれより高いが。

年齢に関しては、それと同じくらいだった。

「君の名前は？」

男性、いや、男子はそう聞いた。

「つかつちは凍空」なゆき、つて言つます。」

それに対し、それは正直に応えた。

「「なゆきつやんだね」

男子は続けざまに質問をした。

「じゃあ、いなゆきちゃんのクラスは何かな？」

なんだか、子供を誘拐するお兄さんみたいな喋り方である。

しかし、それは、正直に応える。

「はい、うちっちはバーサーカーってクラスだと思います」

男子は目を丸くした。

バーサーカーといつのは、簡単に言いつと、理性を失う。

そして、その代わりに、ほかのサーヴァントを超越する破壊力を得る。

そういうクラスである。

だが田の前のそれは、きちんと理性を保つている。

さらに言えば、華奢な少女の身体に、他の追随を許さぬほどの怪力があるようにも見えない。

そういう点から、男子は驚いたのだ。

「いなゆきちゃんはバーサーカーなのに、なんで理性があるの？」

ビストレートに男子は聞いた。

包もうとは全くしない。

「えつと、幾分、生きてた頃に一度理性を失つてゐるから・・・」

それは続けた。

「だから今は理性が戻つてゐるかもしませんよ」

どうやら本人も、詳しく述べ知らなこよつだ。

「そつか、うん、分かつた」

男子は「口」、と微笑んでそれに近づいた。

「これからよろしくね、」なゆきちゃん

「なゆきの頭を撫でながら、男子は言った。

「はー。 よりしへお願ひしますー。」

「なゆきも元気にそれに返した。

しかし。

「あつ、やつといえど、マスターの名前はなんて言つんですか?」

「なゆきも男子に質問を返した。

「僕かい?僕の名前は・・・」

少し間を置いて、男子は言った。

「遠坂桃季、だよ」

「とおさか・・・とうり、さんですね」

「こなゆきはマスターの名前を確認して、少し笑った。

「それじゃあ、これから僕は山に鹿をとりに行つてくれるね」

男子はそういふと、外れた扉を軽々とほめ直し。

壁に立てかけてあつた鎧を手にとつた。

「いつかも行きますー。」

「こなゆきは桃季についていふとした。

「ダメだよ、山の中は危険だし、くまでも出たら大変だ」

「大丈夫です。くまくらになら、片手で倒せますから」

桃季は乾いた笑いを浮かべた。

それが、こなゆきと、桃季の、出会い。

## 「天真爛漫な剛力少女」（後書き）

どうもです。

次回は虚刀流最強の人間。

努力を軽んじ、才能で全てを紡ぐ。

生きることに死ぬ希望を感じる異端。

登場予定。

## 「繰り返す虚刀流最強の女」（前書き）

今回登場するは、最強にして最狂にして最凶。

歴史上最強の強さを持つ、弱き強者。

名を鑑七寒。

そんなこんなで悲劇惨劇無惨劇。

フェイト／カタナガタリ第6話。

始まり始まりつ

～繰り返す虚刀流最強の女～

そこは小さなアパート。

そのへんの廃墟のような「アアパート」。

その一室の床。

そこにはもう言つまでもないが、謎の文様が描かれている。

その部屋にはリーゼントの男が立っている。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉びつー。」

・・・・・?

「痛つ～」

「うやうやしきを嘗んだよつだ。」

途中で呪文は途絶えてしまつた。

「よーし、もう一度だ」

その男は初めから呪文を唱え直した。

「天秤の守り手よつ！」

床の文様が青く光輝いた。

今までで一番の強風が吹き荒れ、リーゼントが崩れた。

そして、それは現れた。

「あなたが私のマスター……ですか？」

か細い声だ。

「おう！ オレがお前のマスターだ」

男は髪型を整えながら言った。

「そうですか」

短くそれは応えを返した。

「美人なのに釣れねえなあ、色々話すことあるだろ？」

男は軽い口調でそれに言った。

「そこそこ若いようだ。

「そうですね、でも申し訳ありませんが

そこで一度区切りをつけ。

「私は早く死んで脱落したいんです」

それは言った。

「はああ？」

男は田元を逕ませながら言った。

自ら脱落したいなんてサーヴァントなど聞いたことがない。

驚きも当然だわ。

「なんで死にたいんだよ？ オレ何か悪い」としたか？」

男は少し申し訳なさそうに聞いた。

「いいえ、あなたが原因で死にたいわけではありません」

「だつたらどうして・・・？」

それは静かに応えた。

「私はもう生前ににおいて役目を果たしました」

それは続けて語った。

「弟の成長を見届ける」とができました

「私は生前になんの未練もありません」

「生き返る意味も、私にはほとんどありません」

それは男に向けて言いのけた。

しかし男は言つた。

「せとんじ、お前、今、せとんじ、何と言つたよな？」

男はきらりと話を聞いていた。

「私にはせとんじあります」

ほとんじ、とこいじとは、少しなら未練は残つていろよいにも捉えられる。

男はそこには注目した。

外見とは違い、頭はキレるようだ。

「せとんじ、とこいじとは、少しなら生を返してやりたいじと、あるんじゃねえのか？」

男はそれに向けて言つた。

それは少し強く応えた。

「唯一、未練があるなら、それは」

また区切りをつけて言つた。

「今の弟と全力で勝負したら、どうなるかが気になるくらいです」

このカードメントは、生前に弟と真剣勝負をした。

その時は弟の知人の「奇策」という作戦により。

自らも認める敗北を味わった。

生前のそれは体が以上に脆く。

全力を1秒でも引き出せば、全身が砕け散るような激痛を伴つ。

そんな生前を送つたのだ。

全力を余すことなく引き出せる今の状態は、それにとって至高だろう。

「十分な理由じゃねえか」

男は強く言った。

「弟と全力で兄弟喧嘩したい・・・これ以上なく熱い理由だぜ」

なにかを取り違えているようだ。

「オレはこれ以上なく最高のサーヴァントを呼んだみたいだぜ」

完全になにかを勘違いしているが。

それは言った。

「面白い方ですね・・・・マスター」

初めてそれは男をマスターと呼んだ。

「わかりました、健全な身体を得た私の力も試したいですし」

それはどうやら戦いに参加するようだ。

「おー、それはそうと、お前の真剣と、クラスはなんなんだ？」

男の問いかけにそれは静かに応えた。

「虚刀流……」

それは言葉を詰まらせ、言った。

「虚刀流七代目仮当主、鑓七実です。クラスはランサーだと思いま  
す」

本来は当主でもなんでもないのだが、それは言った。

「なるほど、ランサーか……でも槍とか持つてねえみてだけど?..」

ランサーとは槍を操るサーヴァント。

当然の疑問だらう。

「私の得意技は、相手を槍の「ごとく貫く技ですか」

平然と淡々とそれは応えた。

「な、なるほど……」

少し顔をひきつらせている男。

それは男に言った。

「マスターの名前は、なんですか？」

その質問に男は得意げに応えた。

「オレの名前は如月弦太郎だ、すべてのマスターと友達になる男だ！」

大声で勝ち名乗りでも上げるよつこ、名乗った。

「わざわざ、げんたわざ。ですね」

それはゆつくりと言い直して、覚えた。

「おひ、じゃあこれからよろしくな、七実！」

男はクラスではなく、それを生前の名前で呼んだ。

「はい、弦太郎」

それもマスターと呼ばずに、男を名前で呼んだ。

それが、七実と、弦太郎の、出会い。



～繰り返す虚刀流最強の女～（後書き）

次回登場するは。

剣においては敵を知らず。

剣聖とまで言われた墮剣士。

登場予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4219z/>

---

刀語×Fate ~現代に集う英雄たち~

2011年12月19日20時54分発行